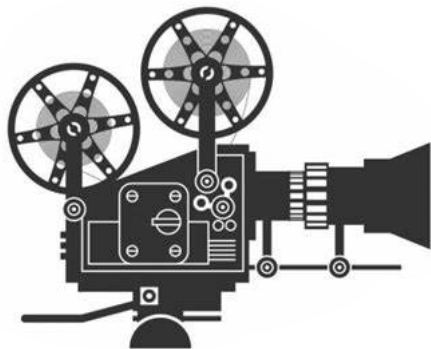




いにしえの映画つれづれ①

「十二人の怒れる男」(1957)

千葉 豹一郎

近年盛んなシネコンは、全席指定で立ち見なしの入れ替え制。途中入場不可なので、鑑賞気分をそがれることも少ない。劇場もきれいで飲食等も充実しており、まずは快適な環境といえよう。若い世代は映画を観に行くといえばシネコンで、これが当たり前前と思っている。

ただ、上映時間や劇場が予告なく変更される、売店で買った以外の飲食物の持ち込み禁止、マナー啓発の呼びかけがくどい等劇場側の都合で客を管理している、そのくせ鑑賞マナーの悪い客への対応が不十分といった不満の声もあり、かつての映画館を知る年代では特に強い。以前はロードショー館以外にほとんど指定席はなく、立ち見は当たり前。2番館、3番館などいつも混雑していて、2本立て百円の3番館など満員電車並みだった。

いずれも禁煙なのに場内は真っ白けで、注意を促す場内アナウンスもどこ吹く風のボイ捨て。トイレも汚く、売店の飲食物もぼったくってロクな物がなかった。痴漢も多く、アメリカ人らしいオッサンに触られたこともあった。場末の映画館ではケンカや恐喝なども珍しくなく、ある種危険な場所でもあった。

しかし、途中入場も可で、気が向いたらふらりと入って観ることができた。飲食物の持ち込みも可のため、弁当持参で朝から晩までくり返し観る客もいて、極めて自由度の高い空間だった。週末にはオールナイトの劇場もあり、どこも熱気がむんむんしていた。決定的に違うのは当然ながらフィルム上映で、2、3番館などでは上映中に使い回して傷んだフィルムが切れて中断し、観客が騒ぎ出すこともあった。

現在では映写機設備のある劇場は稀で、旧作の多くは少数を除きデジタル化されていないため、主に旧作を上映する名画座

は風前の灯だ。

おまけに、以前は毎晩のようにゴールデンタイムや深夜に並んでいた各局の洋画劇場枠も激減して、名作でも制作年度の古い映画はほとんど放映されず、特にモノクロ作品は敬遠というより嫌遠されている。

これでは、歴代の名作に触れる機会も少なく、もったいないことこの上ない。このように、映画ひとつとっても世代間格差があり、ある年代以上には懐かしく、若い世代にはえっ、と驚くようなつれづれを、今回から時に外画ドラマなども交えながら自由に綴ってゆこうと思うので、どうぞよろしくお付き合いください。

さて、読者の皆さんの中には裁判員を経験した方はいませんか？この裁判員裁判は、18歳以上の市民6人と裁判官で構成される日本独特の制度である。重大な刑事事件の一審のみで、量刑までを多数決で決する。当初から異論も多く、守秘義務が厳重過ぎる、死刑も含む量刑までを決めるのは心理的負担が重い、裁判官が議論を誘導している、せっかく裁判員が苦心して出した評決が2審でひっくり返される等の問題点が指摘され、辞退者も多くて期待通り機能しているとは言い難い。あまり知られていないが、日本でも戦前に陪審制が実施されたことがあるものの戦時中に施行停止されたままになっていた。

一方、参考にしたとされるアメリカの陪審制は無作為で選ばれた市民12人で構成され、評決は全員一致が原則。裁判官は加わらず量刑のみを決め、民事裁判でも採用されている。身近なものであるだけに多くの映画、ドラマ等に法廷場面が登場し、弁護側も検察側も陪審員にアピールしようと、役者顔負けのパフォーマンスを繰り広げるのはおなじみの光景だ。

市民感覚が反映される点で一見理想的なようだが、偏見や人種的な偏り、素人ゆえの誤審やパフォーマンスに流され易い等の問題点がかねがね指摘されてきた。

これに真正面から切り込んだのが「十二人の怒れる男」(1957年)である。名優中の名優と言われたヘンリー・フォンダが唯一制作までを手がけた。アメリカの良心と称賛されたフォンダの面目躍如だ。

出演者はフォンダら陪審員を演じるほぼ12人。被告は父親殺しで起訴されたプエルトリコ系の18歳の少年で、有罪となれば死刑は免れない。大勢が即決で有罪に傾く中、あまりの安易さと事件の重大性に鑑み、有罪立証にも疑問を抱いていた8番(フォンダ)一人が、疑わしきは被告人の利益にとの立場から無罪を主張する。

はたして議論は紛糾し、膠着状態に陥った8番は一か八かの賭けに出る。再度の評決を要求し、他に賛同者が出なければ多数決に従うというのだ。

結果は孤軍奮闘する彼に手を差し伸べる老人9番(ジョセフ・スウィニー)が現れ、果てしない議論が繰り広げられる。

息子との確執から被告に敵意さえ抱いて怒鳴りまくる3番(リー・J・コップ)、野球の試合に間に合わせたいばかりに早く済まそうと無罪に変える無責任なセールスマン7番(ジャック・ウォーデン)、偏見に凝り固まった叩き上げの自動車修理工場主10番(エド・ベグリー)、東欧からの移民でアメリカ市民としての義務をまっとうしようとする誠実な時計職人11番(ジョージ・ヴォスコベック)、信念がなくコロコロ意見をかえる広告代理店社員12番(ロバート・ウェッバー)、冷静に議論を検証する株式仲買人4番(E・G・マーシャル)、人情に厚いガテン系の中年男6番(エドワード・ビンズ)ら多彩な人間た

ちはまさに社会の縮図だ。

夕立も挟んで議論は白熱し、特に8番と3番は激しく対峙してつかみ合い寸前にまで発展するが、その過程で法廷では見落とされていた様々な事実が次々浮かび上がり、また一人、また一人と無罪に傾く陪審員が増えていく。

まるでサスペンス映画のような展開で、回想場面など一切使わずに事件の現場をありありと浮かび上がらせる手腕は見事という他ない。

最後には立場が逆転し一人有罪に固執する3番もついに折れ、一同は陪審員室を後にする。8番はテーブルに伏して放心している3番にそっと上着を着せ掛け、陪審員室を後にする。

誰もいなくなったテーブルの上をカメラが舐め、散らばったメモや灰皿、マッチ等があらためて激しかった議論を物語る。

一同が夕暮れの街に次々散っていく中、裁判所の玄関で9番が8番を呼び止める。「お名前は?」。老人は、勇気と信念をもって一人果敢に戦った男の名を訊かずにはいられなかったのだ。名乗り合って互いの健闘を称えあうように固い握手を交わすと、己の義務を存分に果たした8番は、夕立の上がった空を見上げながら爽やかな表情で裁判所の前の階段を下りてゆく。

観ているこちらも、一室で展開された息もつかせぬ緊張から初めて屋外に出たラストシーンで一気に解き放たれ、爽やかな感動が沸き上がる。

エンドマークの後、陪審員一人一人を映し出し、議論の様子を真上から俯瞰したエンドロールもまたいい!素晴らしい名画をじっくり堪能したという満足感に浸れること請け合いだ。あえて難をあげれば、リベラルといわれたフォンダだが、12人は全員白人の男性。ただ、黒人と白人女性のキスシーンが物議をかもした当時では無理もなく、題名もMenだから看板に偽りはない(笑)。

本作を事前に陪審員や裁判員に観せれば、必ずやより真剣に討議するに違いない。もっとも、日本では事前面接で3番や7番のような適正が疑われる人間はお引

き取り願うようだが…。いずれにしろ、人の魂を強く揺さぶる傑作であることに変わりはない。

舞台劇の映画化のようだが基はテレビドラマで、これを視ていたフォンダが感銘を受けて映画化に乗り出した。

原作者でテレビ版と映画版の脚本と共同制作も担当したレジナルド・ローズが、長時間の議論に及んだ殺人事件の陪審員を務めた実体験から生まれたものだった。

ローズは、後に4番を演じたE・G・マーシャルを主演に傑作の誉れ高いドラマ「弁護士プレストン」も手がけるなど、この時の経験から大きな影響を受けた。映画化に際しては、俳優から演出家に転身しテレビでも活躍していたシドニー・ルメットを抜擢。映画初演出にしてアカデミー賞にノミネートされ、ベルリン国際映画祭の金熊賞を受賞。確固たる地位を築いてオールスターの「オリент急行殺人事件」(74)等の一方、「セルピコ」(73)「狼たちの午後」(75)「評決」(82)「NY検事局」(97)等の問題作にも挑み晩年まで社会派としての顔も持ち続けた。フォンダの信頼も厚く「女優志願」(58)と「未知への飛行」(64)でもタッグを組んでいる。共演者には3番のリー・J・コップと10番のエド・ベグリー以外はほとんど無名だった俳優たちが起用され、9番のジョセフ・スウィーニーと11番のジョージ・ヴォスコヴェックはテレビと同じ役を演じている。

いずれも本作を契機に大きく飛躍して、演劇人でもあっ

たフォンダの目に狂いはなく、プロデューサーとしての手並みも見事なものであった。

低予算のため6週間ほどで撮影されたが、同じカットが一つもないなど映画技法的にも優れ、ハリウッドとは対極に位置するいわゆるニューヨーク派の先駆的作品としていまだに高く評価されている。

アカデミー作品賞をはじめ多くの賞にノミネートされた他リメイクも盛んで、ロシア版やジャック・レモン主演の単発ドラマ、モチーフにした「12人の優しい日本人」(91)や、たびたび舞台でも上演され8番を新克利、山本宣が演じたそれぞれの舞台も観た。何度観ても面白く、やはり映画は脚本次第、使うべきは金より頭だ、と実感する。上映時間も96分と程よく、2時間枠のテレビにもうまく収まる。制作費ばかりかけて長いだけの、観た後に何も残らないような昨今のいくつかの映画とは大違いだ。ちなみに、本作を初めて観たのは



公開時の劇場パンフ

淀川長治氏が解説を務めていたNET（現テレ朝）の「日曜洋画劇場」で、フォンダの吹き替えはウォルト・ディズニー自らのご指名で「ディズニー劇場」の声も担当していた小山田宗徳。内田稔の日テレ版もある。法政大学の文化祭で字幕版が上映された際に観に行ったが（証人に證の旧漢字が使われていて公開時のプリントだったようだ）、本作のようにセリフの多い作品は字数制限のある字幕版より吹き替えの方が生き生きしていると思ったものだった。本作が最初にソフト化された際は内田版で、小山田版は永らく幻だった。筆者はまだ高価だった家庭用ビデオデッキを帰省中の友人から借りている最中に、折よくリピートされたお陰で小山田版を録画でき（テープは4千円もして痛かった！）、友人などからよく貸し出しを頼まれた。しかし、ブルーレイ版では双方の版と字幕版も収録され、おのおのを見比べられるようになった。特典映像も付いていて、最後の存命者だった4番のジャック・クラグマンがギャラは破格に安い3千ドルだった、と苦笑まじりに語っていた。もっともタダでも出たけどねと付け加え、稀代の名画に出

演できた幸運と自負をにじませていた。ともあれ、未見の方には、ぜひご覧いただきたい一本である。

「十二人の怒れる男」1957年 モノクロ

Twelve Angry Men

原作・脚本 レジナルド・ローズ

監督 シドニー・ルメット

出演 ヘンリー・フォンダ

リー・J・コップ

エド・ベグリー

E・G・マーシャル他

著者紹介

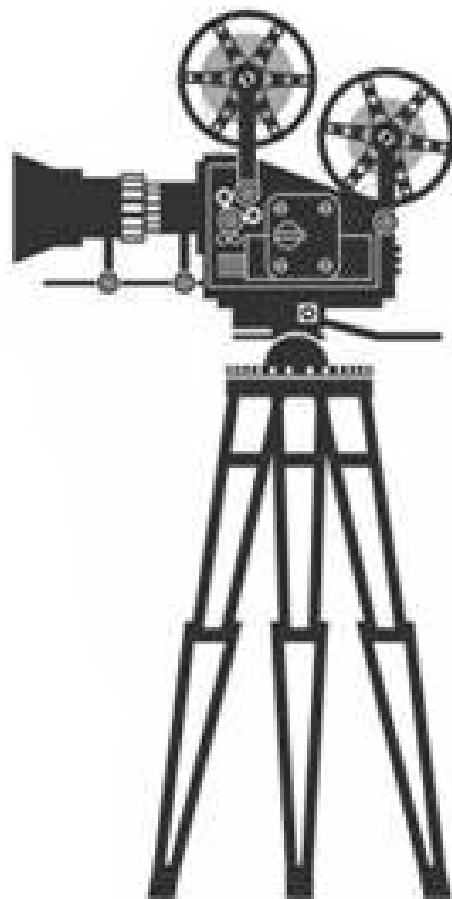
千葉豹一郎

作家・評論家。著書に「法律社会の歩き方」(丸善)「スクリーンを横切った猫たち」(ワイズ出版)(電子版はアドレナライズ)「昭和30年代の備忘録(電子版)」(ユニワールド)「猫と映画人(電子版)」(アドレナライズ)等他、「東京新聞」「ミステリマガジン」(早川書房)「猫生活」(緑書房)等をはじめ連載も多数。独特の切り口で草創期からの外画ドラマの研究や紹介にも力を入れている。

いにしえの映画つれづれ①

「十二人の怒れる男」(1957)

千葉豹一郎



ブルーレイ版のパッケージ。手前の白服がフォンダ



ブルーレイ版パッケージの裏面